

ガット弦を張ったチェロで弾く、オーガニック（有機的）な音楽

バロックとモダンのスタイルに調整し、プレーンガット（羊腸）弦を張った2台のチェロと、バロック、クラシカル、モダンの弓を使い分け、様々な時代の無伴奏作品をご紹介しますリサイタルシリーズ、第2回もまた——J.S. バッハの無伴奏チェロ組曲から現代の作曲家の新作（委嘱作品）まで——多彩な音楽を取り上げます。

クラシカルボウで弾く1800年前後の作品に、今回はデュポール兄弟の兄ジャン・ピエールを選びましたが、今回は弟ジャン・ルイの作品を演奏します。チェロの名手であったデュポール兄弟との出会いによりベートーヴェンは最初の2つのチェロソナタを書きました。私のライフワークの一つであるベートーヴェンのチェロとピアノのデュオ作品を探求するうえで、デュポール兄弟の存在は欠かせません。いつの時代も作曲家と演奏家が互いに影響を与え合うなかから、新しい芸術が誕生するのだと思います。

今回、新曲を委嘱したパブロ・エスカンデ氏は、アルゼンチン出身の作曲家・鍵盤楽器奏者で、オランダに学び、現在は京都を拠点に活動しています。バロック音楽に精通するエスカンデ氏は、自身の音楽をネオ・バロックと位置づけ、アルゼンチン独特のリズムや音楽語法をベースにしながらも、舞曲や対位法、修辞法、明解な対比などバロック的な要素を取り入れ、知的な遊びのような魅力的な作品を発表しています。昨年出来上がった新曲「白い馬のフィドル」はスコルダトゥーラ（変則調弦）を使います。想像力を掻き立てる作品をどうぞお楽しみに！

一般的なスチール弦に対し、天然素材であるガット弦は、倍音成分を多く含み、自然界の音のように抑揚や陰影に奥行きがあり、凹凸のある表現が可能です。近代以降、音楽はより大きな音と均一性を求めて発展しましたが、現代の私たちが必要としているのは、有機的なもの、生命あるものに触れることではないでしょうか。

ガット弦のチェロで無伴奏作品を演奏することは瞑想に通じます。身体と楽器と作品のつながりに集中していくことで、おなかの底＝肚から共鳴し、より深い理解へと向かっていく。弦の羊腸、弓の馬尾毛、そして木。生命あるものから生まれた楽器は、強引に鳴らされるのを嫌います。楽器と共に呼吸することで、音楽に新たな息吹を与え、それをみなさまと分かち合うことができたならこれ以上の喜びはありません。 富田牧子



富田牧子 Makiko Tomita

東京芸術大学在学中にリサイタルを行い、演奏活動を始める。イタリア、フランス、ドイツ、オーストリアの音楽祭や講習会に参加、ニューヨークでH.シャピロ氏の指導を仰ぐなど、ソロと室内楽（弦楽四重奏、ベートーヴェンやロマン派のソナタを主とするピアノとの二重奏）の研鑽を積む。大学院修士課程修了後ハンガリー・ブダペストに留学、バルトーク弦楽四重奏団チェロ奏者L.メズー氏に師事。

NHK-FM「名曲リサイタル」、ORF(オーストリア放送)の公開録音に出演。弦楽四重奏団のメンバーとしての活動（古典派のハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン、そしてシェーンベルクやウェーベルンなど20世紀初頭の新ウィーン楽派をレパートリーとする）を行う。

ピリオド(各時代や様式に合った)奏法への関心を深め、バロックと現代の楽器にプレーンガット(羊腸)弦を張り、様式の異なる弓を使い分け、17世紀から現代までの無伴奏チェロ作品を集めたソロリサイタルを各地で継続中。様々な楽器との組み合わせによる「充実した内容の音楽を間近で味わうコンサート」の企画を続け、室内楽の楽しさを広める活動をライフワークとしている。またパーカッションのコスマス・カピッツァ氏とのデュオ《羊とヤギ》で、ヒルデガルト・フォン・ビンゲンなど中世の音楽や民俗音楽を土台に即興を織り交ぜながら独自の世界を展開し、2017年CD「O Terra (大地よ)」をリリース。身体と演奏の繋がりを探り、耳を澄まして、楽器の音を引き出すレッスンや、倍音を聴きながら調和する弦楽アンサンブルワークショップも行っている。



主催: MA企画 kikaku_ma@yahoo.co.jp

富田牧子Web詳細情報 <http://tomitamakiko.seesaa.net>

Photo: Shinichi Kida